

国立国会図書館における

漢籍収集の沿革とその構成

土屋 紀 義

はじめに

- 一、帝国図書館時代の漢籍の収集
- 二、国立国会図書館における漢籍の収集
- 三、国立国会図書館所蔵漢籍の構成
おわりに

はじめに

国立国会図書館に所蔵される漢籍⁽¹⁾は、質・量ともに我が国では屈指の内容である。東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、東洋文庫、内閣文庫等の代表的な漢籍所蔵機関の所蔵資料に勝るとも劣らないレベルの内容を持つ。

その全貌を把握することは、容易なことではなかった

が、幸いにして、『国立国会図書館漢籍目録』（国立国会図書館、昭和六二年）の刊行によって、これまで部分的にしかうかがうことのできなかつた国立国会図書館所蔵漢籍の全容が略ぼ明らかとなった。その凡例によると、収められている昭和五六年一二月末現在整理済みの資料の数は、二三、九四三タイトル、二一四、四四五冊。それから九年を経過した現時点では、毎年二、〇〇〇から三、〇〇〇冊の中国語図書が受入れられているので、国立国会図書館が所蔵する漢籍の数には、二、三万の増加があるはずである。

ちなみに、日本図書館協会図書館調査委員会編『日本の図書館——統計と名簿——』一九八九年版によると、東京大学東洋文化研究所および京都大学人文科学研究所には、夫々洋書をのぞくと、三三万七千冊、三七万三千冊の圖書が所蔵されている。これらの数字には日本語圖書も含まれており、また京大の場合、日本・西洋をも研究対象としている機関であるので、これらによって、厳密な比較をすることはできない。しかし、国立国会図書館所蔵の漢籍が、日本国内でどのような位置にあるのかを、うかがう一つの目安にはなるであろう。

本稿は、その淵源をたどれば江戸時代にまでさかのぼることができ、現在も積極的な収集活動の対象となつている資料群の形成の沿革をたどり、その結果どのような特色を持った構成ができて上つていのかをさぐり、延いては、優れた資料群の形成には、どのような条件が必要なのかということを考える手掛りを得ることをも目論だ。

一、帝国図書館時代の漢籍の収集

いうまでもなく、国立国会図書館の蔵書の最も重要な部分は、その前身の一つである帝国図書館の蔵書であるが、漢籍についても、帝国図書館時代にすでに優れたコレクションができあがっていた。本節では、その形成の過程を跡づけて行く。

周知の通り、帝国図書館のそもその淵源が書籍館で、それがさらに東京書籍館、東京府書籍館、東京図書館と変遷して行ったわけであるが、書籍館時代の蔵書の大部分は、東京書籍館に引きつがれていない⁽²⁾。東京書籍館は、新たに収集を開始したのだが、そのなかで大きな位置を占めていたのが、所謂文部省交付本であり、とりわけ、旧藩蔵書が、漢籍コレクションの形成という観点から見て重要である⁽³⁾。

明治八、九、十一年に文部省より交付された和漢書は総計三一八三部、四三六三〇冊で、それは、三府六十県の六万二千二百三十部から東京書籍館に必要な蔵書として選ばれたものであつた⁽⁴⁾。これらのうち、漢籍の占める割合は、タイトルで全体のうちの四分之一強、一タイトルあたりの冊数の多い叢書がかなり含まれているので、正確なところはわからないが、一万数千冊というところである⁽⁵⁾。

その内容は、漢籍の所謂四部分類の全分野に万遍なく分布している。江戸時代、各藩の学問は、中国の学問がその大きな柱のひとつであり、この方面の需要に沿って収集された資料群から選ばれたわけであるから、漢籍として基本的なものがおおむね含まれていることは、当然のことであろう。そして、このようなかたちの出発は、その後百年以上にわたる漢籍の収集の方向に、一定のかたちを与えたということができ、またそれによってつくりあげられたコレクションの特徴をも決定づけたと言ひ得るのではない

だろうか。

これらの資料群は、今日の目から見ると、例えば、内閣文庫所蔵資料などと比較して、一部の例外を除いて、必ずしも稀覯本は多くはない。その中で、石川鼎、つまり旧加賀藩から入った資料群については特筆すべきである。この一群は、漢籍の多さにおいて、群を抜いている（タイトル数に於いて旧藩から入った漢籍の1/5強を占める）だけでなく、約百タイトルの地方誌が含まれている。これら地方誌の中には、明版の地方誌が多く、その中に稀覯のものも少なくない。なかには、天下の孤本もあり、現在、多くのものが貴重書に指定されている。

旧藩所蔵の漢籍は、加賀藩の旧蔵資料のように突出した場合は例外としても、現在においても国立国会図書館所蔵の漢籍の中で、質の面からも量の面からも、重要な地位を占めている。

図書館における資料収集における、既成のコレクションを受け入れることの意味が如何に大きいものであるか、本稿の行論においていざれ明らかになって行くが、その一方で、恒常的な収集活動がなくては、全体としては片寄った資料群の構成となってしまう。しかし、このような活動の内容は、重要ではあるが後世にまとまった記録としてはなかなか残りにくい。

ここで、日常的に受け入れる場合の一例を瞥見しておく。明治一二年（一八七九）四月九日、仙台出身の漢学者

岡千仞（一八三三〜一九一四）が幹事（事実上の館長）に就任し同十三年七月までその任にあった。彼の在任中、漢籍の購入が多かったという指摘が見られる⁶⁾。

試みに当時の受け入れ原簿をしらべてみると、毎年、八十〜九十タイトルの漢籍が購入されている。仮りに此のペースで十年間収集が続けられるとすると、八百〜九百タイトルになるわけで、東京書籍館が文部省より交付された漢籍約八百タイトルと比較して、この数字の持つ意味は理解できるであろう。帝国図書館の漢籍が、このような恒常的な収集活動によって徐々に充実されて行ったということとも見落してはならない。

明治一六年（一八八三）三月一日、国学者榊原芳野（一八三二〜一八八一）の旧蔵書が寄贈された。一四八七点のうち漢籍は一三八点と数は少ないが、そのうち、旧蔵者の見識を示す逸品が多い。例えば、宋版『広韻』曲亭馬琴手沢本『平妖伝』、明刊『唐僧西遊記』など。中国の明・清期の白話小説の稀覯本のなかに、榊原旧蔵本が多い。

明治三十三年（一九〇〇）九月八日、侯爵醍醐忠順（一八三〇〜一九〇〇）旧蔵本三九三部が寄贈された。内容は、大部分が国書で若干の漢籍が含まれている。それも、ほとんどがありふれた和刻本であるが、なかに天文版『論語』が含まれており、すでに明治年間に貴重書として扱われている。漢籍を専門に集めたのではない蔵書家の旧蔵書に重要な資料が、いわば「まぎれこんで」いた一例である。

明治三十九年（一九〇六）七月二日、京都円光寺旧蔵書四〇三点を購入した。仏書、漢籍、朝鮮本からなり、開基元佶の手沢本約六十点（朝鮮本が多い）を中心として、近世後半の和刻本漢籍にまでおよぶ。五山版『中州集』等の善本も多い。

明治三十三年（一九〇〇）～三十四年頃、清国等の新刊書の受け入れが少ないので、特に費用を請求し、収集の強化が図られた。その活動の一環としてか、明治三十三年（一九〇〇）四月、当時清国留学生であった後の東京帝国大学教授、中国哲学者服部宇之吉（一八六七～一九三九）を調査依頼者に任命し、さらに翌年七月、「支那書併独逸書」の調査依頼者に重ねて任命している⁷⁾。この頃、時を同じくして、韓国図書についても同様な処置がとられている。漢籍について、古典のみならず、中国の新刊書にも目が向けられ、さらに朝鮮にも関心が向けられたということは、当時の日本の対外関係の動向が、帝国図書館の収集活動にも一定の影響を与えていた証佐とみてよいのではなからうか。

以上概観したような経過を通じて、明治末年の帝国図書館に所蔵される漢籍は優れた資料群として確固たる地位を確立していた。

試みに、現在、国立国会図書館に所蔵される漢籍のなかで、貴重書に指定されているものうち、当時すでに帝国図書館に所蔵されていた目ぼしい図書の若干をかかげてみよう。

現在、国立国会図書館所蔵資料のうち、重要文化財に指定されている漢籍は二点である。北宋版『姓解』および平安時代写本『天台山記』である。この二点ともに明治年間⁸⁾の収集に係る。

以下、『無垢淨光陀羅尼經』（所謂「百万塔陀羅尼」）、春日版『成唯識論』、宋版『大唐西域記』、宋版『纂図互註周礼』、宋版『春秋経伝集解』、元版『趙子昂詩集』、慶長勅版『古文孝経』、古活字版『羣書治要』等々、ほんの一部を掲げただけでも以上の通りである⁹⁾。

国立国会図書館所蔵の漢籍のなかには、所謂和刻本漢籍が多く含まれているということは、従来より指摘されている。最近、この種資料の全貌を容易に一覧できる目録¹⁰⁾ができたが、おおよそ収集の大半ができたといえる¹¹⁾。この時期であると考えられる。帝国図書館漢籍の基礎が、旧藩所蔵の図書によって置かれたのだから、加賀藩などのように、清国から輸入された図書を購入した藩は別として、多くの藩が、比較的入手しやすい和刻本を入手することによって、その結果形成された資料群に和刻本の多いことは当然予想される。

この予想は、近年相次いで刊行されている県立図書館や地方の国立大学の漢籍目録（これらには、多くの旧藩の蔵書も含まれている）を通覧すると、和刻本が非常に多いということによって裏づけられる。

しかし、上記目録によって、さらにもう一つの帝国図書

館所蔵和刻本漢籍の特徴を見てとることができるといえる。すなわち、主として明治初年から十年代の末年にかけて刊行されたおびただしい数の和刻本漢籍が収録されているということである。いうまでもなくその多くが所謂内務省交付本であるが、ここに指摘したような特徴は、他の漢籍を多く所蔵する機関の蔵書には全く見られないものであり、納本制度を背景にした国立図書館の収書においてのみ現われうるものであろう。

その後、大正年間から昭和一〇年代前半にかけては、漢籍収集という点では、大きな動きは見られない。わずかに、昭和二年（一八二七）八月、千葉県の国分習也という人物より漢籍四六部三七五冊が寄贈されるという記録が見えるのみである。

昭和十年代の後半に入ると、にわかには活発な動きが見えて来た。まず昭和十五年（一九四〇）から開始された、植物学者白井光太郎（一八六三—一九三二）の旧蔵本の購入で、昭和十七年にかけて約六千冊が受け入れられた。このコレクションは、本草学関係を中心とするもので、漢籍に重点が置かれているわけではないが、四部分類で、子部農家、医家に分類される資料を中心にかなりの数の漢籍がおさめられている。

次いで昭和十七年、宇宙物理学者新城新蔵（一八七三—一九三八）の旧蔵書、二千数百点、約一万二千冊が購入された。新城は、東洋天文学史の研究にも画期的な業績を

残した学者であるが、その旧蔵書のおよそ半数が漢籍である。内容は、各分野に比較的万遍なく分布しているが、当然のことながら、四部分類の子部のうちの天文・算法および術数の類に特徴があり、新城旧蔵書の受け入れによって、帝国図書館のこの分野の蔵書の内容は、その面目を殆んど一新し、他機関より抜きん出たものとなった。特に、曆本の数では国内随一である。

なお、新城旧蔵書は、この分野にとどまらず、清朝末年から中華民国初年に刊行された資料を中心に、それまでの帝国図書館蔵書の欠落部分を少なからず填めるところがある。

さらに、昭和十九年（一九四四）三月二二日、植物学者伊藤圭介（一八〇三—一九〇一）より孫で同じく植物学者であった篤太郎（一八六五—一九四一）に襲蔵された六六五点の本草学関係資料が購入された。このコレクションは、まさに購入された白井光太郎の旧蔵書とその性格を同じくするもので、両々相俟って帝国図書館所蔵の本草学関係資料の充実に貢献する所大であった。

戦中より戦後間もなくにかけて、この他にかなり積極的に漢籍が収集されていた。その成果は『国立国会図書館支部上野図書館和漢書書名目録（古書之部）』昭一八、一—昭二四、三—一九五三、一—によって一覧することが可能である。この時期、漢籍に限らず、日本の古典籍も活発に集められたようである。

国立国会図書館所蔵漢籍のうちで、四部分類の史部書目類は、特に充実している分野の一つである。国立図書館の蔵書として当然のことではあるが、前記目録と、『国立国会図書館漢籍目録』とを比較して見ると、大半がこの時期にまとめて受入れられたものであるということがよくわかる。

これと略ぼ時を同じくして、実業家亀田候吉より昭和四年（一九三九）五月に寄贈された債券を基金として古書九三点が購入された。分野は特定のものに限られないが室町末期写本『唐三体詩注』、古活字版『涅槃経疏』などの漢籍の善本が含まれている。個人の篤志による資金の寄贈の果す役割が、漢籍の収集においても重要であったことを示す一例である。

二、国立国会図書館における漢籍の収集

太平洋戦争の終結後、帝国図書館は国立図書館へと改称され（昭和二二年（一九四七）二月）、さらに二三年（一九四八）六月、国立国会図書館が開館し、国立図書館は、昭和二四年（一九四九）四月、国立国会図書館支部上野図書館となった。この間、旧帝国図書館の一〇〇万の蔵書は、国立図書館、支部上野図書館へと引き継がれ、発足間もない国立国会図書館の蔵書は寥寥たるものであった⁴⁰。当然のことながら、昭和二二年三月一九日の「国会図書館法」

の成立を受けて、新図書館の蔵書収集のための作業がはじまっていた⁴¹。そのために計上された費用は、当時の金額にして約一千万円と言われている⁴²。そして、この費用によって、衆議院において、旧満鉄東亜経済調査局の蔵書、および藤山雷太によって設立された中国経済文化研究会に所属する支那文庫のコレクションが購入された。

前者は洋書であるが、後者は、和漢洋の資料を含み、そのうち漢籍だけでも四万二千数百冊に達していた⁴³。その内容は、四部分類の万般に渡り、一般的なものでも、例えば、『四部叢刊』や『叢書集成』などの、一九二〇―三〇年代に刊行された大部な叢書は、在来の帝国図書館の蔵書の欠落部分を補うところ大である。だが、本コレクションの場合、特に清朝中期以降を中心とする地方誌、族譜および四部分類の史部職官類ならびに政書類に属する資料、すなわち、とくに清代の法律・政治・財政・経済に関連する資料に特徴がある。さらに中華民国に入って出版された基本的な概説書、研究書等も丹念に集められている。

このコレクションは、短時間のうちに急速に集められたと見え、珍らしい本は余り入っていないという評もある⁴⁴。しかし、帝国図書館に出来あがっていた漢籍のコレクションとはかなり異質な要素を含むもので、それぞれ相おぎないあう関係にあったと言えるであろう。

翌昭和二三年、新発足の国立国会図書館によって、東亜研究所旧蔵の漢籍約二万八千冊が購入された。東亜研究所

は、昭和十三年（一九三八）企画院のもとに設けられた国策調査機関で、豊富な運営資金を背景にアジア全域の調査を行なっていたが、敗戦とともに消滅の道をたどった。

その所蔵漢籍の内容は、「支那文庫」のコレクションの性格と極めて類似しており、わずかに十年足らずの間に三万冊近い漢籍が収集されたという点によつても似通つた特徴を持つはずである。その結果、当然のことながら重複を伴ないつつも、相おぎない合う関係にあつて、より充実したコレクションが形成されることとなつた。

東研本の購入価格は、当時の金額で約七十万円、当時の一般的な評価にくらべると半額で入手できたと言われている⁴⁰。

以上二つのコレクションの受け入れは、一挙に受け入れられた漢籍としては、その数量において、帝国図書館およびその前史も含めて空前のことであり、恐らくは今後もあり得ないことであろう。しかも、これら資料群を受け入れたことの意義はこれのみにとどまらない。むしろそれらの性格の持つ意味の方が大きい。

一九二〇年代頃から日本の中国研究とくにその歴史の研究において、社会・経済史を重視する傾向が現われ始めた。また、従来どちらかという等閑視されていた明・清時代の学問的な研究にも焦点が当てられるようになって来た。これらの研究に於いて史料として重要なのが、一部の例外を除いて、従来余りかえりみられることのなかつ

た、地方誌、族譜、および所謂政書類の図書であつた。

その結果、この頃から、日中両国の大学等研究機関は、この方面の資料の収集に積極的に乗り出した。「支那文庫」、「東研本」の収集は、このような背景のもとにおこなわれたものであつた。一方、当時の帝国図書館の漢籍収集活動は、このような動向に参加するようなものではなかつたようである。したがつて、帝国図書館にできあがつていた漢籍のコレクションは、質的にも、量的にもすぐれたものではあつたが、伝統的な中国研究に、すなわち、思想、文学、古代史の研究に重点が置かれた配置となつていた。「支那文庫」本も、「東研本」も、収集開始の時点から見ても、また収集方針のあり方から言つても、帝国図書館において収集された漢籍とは、大きくその性格を異にするものとなつたことも、また当然のことであつた。そして、このように性格を異にする資料群が合体されることによつて、今日の国立国会図書館に所蔵される漢籍の広範囲な内容を持つ基本的な性格が決定されたのであつた。

なお、「支那文庫」及び「東研本」の受け入れによつて、従来手薄であつた四部分類の政書類において、「大木文庫⁴¹」を擁する東大東洋文化研究所および東洋文庫と、その数量の点で相拮抗するに至つたという点に触れておいても良からう。

昭和二四年（一九四九）から二九年（一九五四）にかけて、国語学者亀田次郎（一八七六一一九四四）の旧蔵書約

三、四〇〇点が購入された。その中心は国語学関係の図書であるが、中に百数十点の漢籍も含まれ、その殆んどが、中国音韻学関係の図書である。なかでも宋代に成立した中国の音韻体系を図解した書物で、中国では失なわれ日本にのみ残った『韻鏡』の江戸時代刊本の収集は徹底的なものである。

昭和二四年（一九四九）七月一三日、東大の皮膚泌尿器科の教授であった土肥慶蔵（一八六六—一九三二）の旧蔵書の購入が決まった。土肥の膨大な旧蔵書は三井文庫に移ったが、そのうちの医学・本草関係が東大に入り、漢詩文関係の三、四三四点七、八九八冊が上野図書館によって購入され残りの大部分がカリフォルニア大学バークレー校に入った。上野図書館に入った漢詩文のコレクションは、江戸時代を中心とする日本の漢詩文集の集成として、国内に比類のないものである。したがって、その内容は、必ずしも漢籍を中心としたものではない。しかし、コレクションの性格からして、四部分類の集部に属する図書を中心とする少なからぬ漢籍を含む。和刻本漢籍百点強も含まれており、なかには、貴重書に指定されている室町末期刊本もある。

昭和二七年（一九五二）一月一八日、阿波国文庫（中国地誌類）購入が決定されている。

昭和二九年（一九五四）、漢籍の古書肆として、明治年間より大きな足跡を残して来た文求堂の閉店に際して、若干

の資料が購入された。

昭和三十五年（一九六〇）中華民国大使館から新刊書一、五〇三冊が寄贈された。

昭和三七年（一九六二）から三八年にかけて浜田徳海旧蔵の敦煌文書計四七点が購入された。

昭和三八年、囲碁普及に貢献のあった瀬越憲作（一八八九—一九七二）の旧蔵書、約三二〇冊が寄贈された。その大部分は、江戸時代以後の日本の囲碁に関するものであるが、極く少数の漢籍が含まれている。なかには、日本では、他で見ることのできない、囲碁関係の明刊本がある。このような特定分野のコレクションを受け入れることによつて、全般的な分野をカバーしている大図書館では通常のルートでは収集されえない資料が蔵書に加えられる一例であろう。

昭和四二年（一九六七）大韓民国東国大学から高麗版大蔵経一、三三三冊が寄贈された。これは、慶尚南道の古刹海印寺に現存する版本によつて摺刷されたもので、高麗版は、漢訳仏典の集成である大蔵経の諸版のなかでも特にすぐれているとされている。

昭和五二年（一九七七）十一月、新潟県新発田で代々医家を営んだ長谷川家旧蔵の古医書三二二点一、六〇〇冊が寄贈された。このなかには、和刻本を中心とする漢方医学関係の漢籍約七〇点が含まれており、帝国図書館時代以来の漢方医学関係のコレクションにつけ加えるところが大

きい。また慶長年間刊の古活字版二点を含み貴重書の指定を受けている。

この頃を最後に、漢籍のうちの所謂古典籍については、まとまった収集は停止している。例年、平均すると二、三点の資料が従来の蔵書の欠落部分を補うかたちで購入されている程度である。これは、この種資料の現状からしても必然のなり行きとも言えるであろう。現在、収集は、専ら中国本土、台湾、香港の新刊書に焦点がしぼられている。この方面の資料については、国立国会図書館発足後、外国語資料収集の一環として力が注がれ、国内でも有数の資料群ができて上っている。その全容は、『国立国会図書館漢籍目録』『新学部』、によってうかがうことができる。

なお、最後に、次の三つのコレクションに言及しておく。枢密顧問官有松英義（一八六三—一九二七）旧蔵の千数百冊。昭和二三年（一九四八）衆議院より移管され、国会分館において長く保管され、最近本館に移された。『皇清経解』、官書局本の『二十四史』、津藩脩道館版の『資治通鑑』等大部なものがその大半を占める。『国立国会図書館漢籍目録』に収められておらず、ここにみえない和刻本若干を含む。その内容は、衆議院図書館編『衆議院図書館所蔵有松文庫図書目録』（昭和八）によって知ることができる。

「陸軍文庫」と仮称されている資料群。「参謀本部文庫」、「陸軍文庫」の印記がある。和古書・漢籍からなるが、漢籍だけでも、確認できた限りでは二百タイトル近くが収めら

れている。地方誌、法律、軍事関係の図書がほとんどである。昭和二〇年（一九四五）に受け入れられた。

漢籍のうち、地方誌を中心に六十タイトル程の整理がすでに終って、最近整理された若干のものを除いて、大部分は、『国立国会図書館漢籍目録』に収録済みである。

「佐野文庫」と仮称される資料群。太平洋戦争末期に外務省の佐野某氏の斡旋により帝国図書館に寄贈されたものである。昭和四四年（一九六九）八月に作成された業務用の仮目録によると五百タイトル弱、約七千冊。主として乾隆年間（一七三五—一七九五）以降の中国刊本からなり、各分野の基本的な文献が、通行本によってバランスよく収められている。その結果、国立国会図書館の在来の蔵書と重複するものも少なくない。まだ未整理の部分がかなりあるが、整理すみの分については、その殆んどが『国立国会図書館漢籍目録』に収録されている。

昭和十八年（一九四三）六月、当時の駐中華民国大使田尻愛義から、六五五部、九二八八冊の漢籍が寄贈されたという記録がある。これと「佐野文庫」資料は同一のものではなからうかと思われるふしがあるが、受け入れた資料の数字に食い違いがある。ここでは断定を避けて、後考に待ちたい。

三、国立国会図書館所蔵漢籍の構成

以上概観して来たような経過を経て形成されて来た国立国会図書館所蔵の漢籍がどのような構成を持つのか、幾つかの観点から見て行こう。

まず、所謂善本の数から見るとどうであろうか。すでに見たように二件の重要文化財を所蔵し、二十点以上の宋元版を所蔵し、明版は枚挙にいとまなく、そのなかには少なからぬ稀覯本が含まれる。また、仏典の古刊本、古写本をはじめとして、五山版等の室町時代刊本もかなり所蔵され、近世初期の古活字版に関しては、国内有数の点数が所蔵されている。しかし、これを他の主要機関と較べてみるとどうであろうか。同じ国の機関である内閣文庫、宮内庁書陵部の所蔵資料との比較だけでも、善本という点でははるかにおよびない。徳川一代の漢籍収集の粹を集めた内閣文庫所蔵資料、およびそのなかでも優れたものを抜き出して移管された宮内庁書陵部の所蔵資料と比較して、旧藩蔵書などの応援のあったものの、白紙に近い状態から出版した帝国図書館の蔵書とでは比較にならないのは当然かもしれない。一方、近代になって収集の始まった東洋文庫、静嘉堂文庫の資料とくらべても善本という点では遠く及ばない。

この点で、国立図書館にふさわしい資料購入費の裏付け

が欠けていたと言わざるをえない。あるいは乏しい予算の中から今日ある資料群を作りあげて行つた、とりわけ帝国図書館時代の先人の努力に敬意を表すべきであろうか。

つぎに、数字の面から見てどの分野が「強」いのかまた、大まかに言つてどの分野が「弱」いのか見てみよう。まず、左に『国立国会図書館漢籍目録』収録資料の大まかな分野別タイトル数、冊数を掲げる。

	タイトル数	冊数
経部	一、三五七	一一、二四六
史部	五、五五七	八四、六二七
子部	四、五二六	三四、七七〇
集部	二、九一四	二一、一四六
叢書部	四七五	四七、五九九
新学部	九、一一四	一四、〇五七

このなかで、新学部を除いてタイトル数が多いのは、史部と子部である。この二部について、さらに下位の分類におけるタイトル数の多いところを見てみるとまず史部においては地理類が二一九一タイトル、伝記類が七三〇タイトル、政書類が八七七タイトル、書目録が四七一タイトルと、他類に抜きんでおり、前二類については、地志之属が一五三タイトル、家乘之属(即ち族譜)が四〇四タイ

トルという数字になっている。子部においては、芸術類一、一七八タイトル、釈家類七一九タイトル、医家類四三五タイトル等が目ばしい数字である。ここで芸術類の数字が極端に多いのは、明治以降に出版されたおびただしい数の法帖の複製が収録されているからである。ここにも、前々節で指摘した納本図書館の収集資料の性格が反映されている。釈家類、医家類も一般的に資料を集めている図書館としては数は多く、天文算法類、術数類の合計三三三三タイトルは数字としては多くはないが、これを他機関の類似資料の数と較べると断然多い。

以上要するに、数字の上からも、前節、前々節で見えてきた収集の事情が数字の上からもはっきりと確認できる。とりわけ大きなコレクションの受け入れが、そのコレクションの特徴をなす分野において、従来手薄であった部分で、穴うめをするだけではなく、一気に充実した分野へと変えてしまうことが良くわかる。

経部の資料が一、三五七タイトルと少ないのは、元來この方面の資料のタイトルが少ないのであって、これはこの機関の漢籍目録にも共通のことであり、国立国会図書館の蔵書に特有のことではない。しかし、集部の数字が二、九一四と比較的少ないのは、明らかに、この分野において手薄であることを示す。元來、集部に分類される資料は、他の分野に較べてはるかに多いのが通例である。したがって全般的に網羅的に収集されていけば集部に分類され

る資料の数が他の分野に較べて多くなるはずである。

ついで、新学部の九、一一四タイトル、一四、〇五七冊という数字も余り大きいものではない。ただし、『国立国会図書館漢籍目録』には中華民国以降、近年に至るまでに出版された古典の注釈書のたぐいはすべて四部分類に入れられているので、近代的な洋装本の数は、この数字をはるかに上まわることになる。しかし、この数十年來出版されているこの種の圖書の数に較べて、活発な収集活動にもかかわらず、充分なものであるとは言い難い。この点については、和古書を除いて、どのくらいの冊数の日本語資料があれば、国外にあって日本研究が可能かということを考えれば、おのずから問題の所在が了解されるであろう。

なお、数字によって、さらに詳細な分類について、その一一の充足度の検討を行ない、それぞれの特徴について検討することも可能ではあるが、余りにも繁雑にわたるの、ここでは、大ざっぱな分類についての検討にとどめた。

おわりに

今後の漢籍収集はどういう方向に行くのであろうか。所謂古典籍については、書誌学的に意義のある極く少数の資料を受け入れ、専ら新刊書の収集に力点を置くという現在の収集のやり方は、当分の間続くであろう。そして、將來は、図書から非図書資料へと収集の重点が移り、そのよう

な段階ではそもそも「漢籍」などという言葉は死語となるかもしれない。

たださし当つての課題としては、一年に二千―三千冊という収集の量が充分なもので、将来の需要に応え得るものであるかという問題があると思われる⁽³⁾。この際、これまでの長い漢籍収集の過程からどのような教訓が汲みとれるであろうか。

本稿は、多くの先行の業績を手がかりに、漢籍収集とその成果という観点から、現在どのようなことが概括できるのかという一つの試みである。最後にこの試みが、注に引用した文献をはじめ、多くの骨の折れる作業の成果を利用することによつてはじめて可能となつたということを通じておこなうてはならない。

注

(1) ここに所謂「漢籍」という語について意味をはつきりさせておく。「漢籍」という場合、一般的に言えば中国語で書かれた書物を指すわけであるが、狭義の用法と広義の用法がある。狭義には、清朝以前に成立した、形態からいうと、原則として線装本（和とじの本）の資料を指す。中国語ではこれを「古籍」と言う。中国の大図書館では、一般的に、このような資料群が「一まとまり」となつて、特別な扱いを受けている。広義には、

中華民国以降現在に至るまで、中国語で書かれた図書すべてをも含む。本稿では、「漢籍」と言う場合、広義の意味を採用している。「国立国会図書館漢籍目録」は、広義の意味にもとづいて編纂されている。（なお中国語で書かれているとは言つても、日本人によつて所謂漢文で書かれた書物等は対象外である。）

この問題については長沢規矩也「わが国における漢籍の翻刻」（『長沢規矩也著作集』第二巻、汲古書院、一九八二、所収）を参照。なお国立国会図書館の所蔵漢籍については、国立国会図書館百科編集委員会編『国立国会図書館百科』（出版ニュース社、一九八九、九。二刷）の漢籍関連の各項目が、概略を知るための手がかりになる。また、その各項目に引かれている文献が、参考文献として役に立つ。

(2) 岡田温「旧上野図書館の収集方針とその蔵書」（『図書館研究シリーズ』No. 5、一九六一、一一―一九九頁。

(3) 旧藩蔵書については、西村正守、佐野力「東京書籍館における旧藩蔵書の収集」（『図書館研究シリーズ』No. 15、一九七三、二）が基本的な文献である。本稿の旧藩蔵書に関する記述は、本論文に依拠している。本論文の第二部「交付書目」によつて、どこの旧藩から何という書物が文部省から交付されたのか、その全貌を知ることができる。

(4) 前掲、西村、佐野論文、五頁。

(5) これらの数字は、前掲西村、佐野論文、第二部「交付書目」に拠つて推定した。この書目には必ずしも全資料について冊数が示されているわけではないので、これによつて冊数を算定することは不可能である。

(6) 陶山国見「蔵書構成の実態調査及びその評価計画について」(『図書館研究シリーズ』No. 16、一九七四、一

二)の資料一「収書業務年表(明治八〜昭和四八、三)」一頁。なおこの「収書業務年表」は書籍館以来の収集活動全般を知るための基本資料であり、本稿もこれに負うところ大である。各コレクションの受入年月のデータは本年表による。なお岡については中田吉信「岡千仞と王韜」(『参考書誌研究』一三三号、一九七六〇、八一〜二二頁)を参照。

(7) 前掲、陶山論文、資料二頁、及び一八頁。

(8) 明治末年の帝国図書館の貴重図書を知るために、次の文献が役に立つ。西村竹間「帝国図書館貴重図書梗概」(『図書館雑誌』第二号〜四号、六号〜七号、九号、十一号、十六号、明治四一年六月〜大正元年十二月)、同「帝国図書館貴重図書梗概補遺」(『図書館雑誌』第十七号、大正二年五月)。本論文は、「古版之部」(刊年不明なるもの)、「古版之部」(刊年分明ならざるもの)、「支那朝鮮古版之部」、「古写経之部」、「古写本之部」、「本邦古版之部」

等の順で掲載され、その内容は、ほとんどが漢籍仏典である。

(9) 西田元子、牛久敬子「国立国会図書館所蔵和刻本漢籍目録稿」(一)〜(八)(『アジア資料通報』、二七卷一〜二八卷九号、一九九〇、一一〜一九九〇、一二)

(10) その一端を反町茂雄「古書肆の思い出」第三卷(平凡社、一九八六)九四頁の記述に見ることができ。

(11) 新発足の国立国会図書館の中国資料室所蔵の資料が如何なるものであるのか見ようと意気込んで上京してきた京都の中国研究者たちが、あまりの貧弱さにあきれて帰つて言つたと言ふ。昭和二十三年八月に国立国会図書館に入館し、中国資料室に所属し、昭和二十九年に辞職した元大阪市立大学教授中山八郎氏の談(一九九〇年十二月二三日)。

(12) この間のいきさつについては、岡田温、山下信庸、植村長三郎、斉藤毅、小林宗三郎「国立国会図書館草創期の収集(共同研究)」(『図書館研究シリーズ』No. 五、一九六一、一一、二二〜二三〇頁)を参照。

(13) 前掲、岡田温等論文 二二八頁

(14) 『国立国会図書館年報』一九四九年版には、漢籍の数「約五二、〇〇〇冊」とあるが、『国立国会図書館百科』の「支那文庫」の項には三三三、六二四冊とある。収集部に保存されている国立国会図書館の『図書原簿』の

No. 11からNo. 28にかけて、「中国文庫」という印を付せられた一群の資料が、一連の通し番号に従って収められている。これが「支那文庫」の資料であることは疑いない。この原簿によって算定すると、漢籍の数は、四万二千数百冊となる。本稿では、とりあえず、この数字を採用した。

(15) 前掲注(12)と同じく、中山八郎氏の談による。

(16) 衆議院図書館委員会における金森国立国会図書館長の答弁による。一九四九年一月一九日。なお、この時の質疑応答から、東研本の購入に関してかなりの異論の存在したことがうかがえる。

(17) 戦前中国にあつて永年法律実務にたずさわり、かつ漢籍の収集にも生涯をかけた大木幹一の旧蔵書。

(18) 前掲、陶山論文「年表」四頁

(19) このいきさつについては、前掲、岡田温「旧上野図書館の収書方針とその蔵書」二〇五頁以下が参考になる。

(20) この数字は、安田健「漢籍目録の刊行」(『国立国会図書館月報』三一六号、一九八七、七) 四頁の「別表1 漢籍目録データ表」による。

(21) 前掲安田論文のデータ表の基礎となつた安田氏作製の詳細なデータ表による。

(22) この点は、邵懿辰撰・邵章統録『増訂四庫簡明目錄標注』や孫殿起録『販書偶記』などを通覧すると良く

わかる。

(23) 参考までにアメリカの主要な図書館における中国語資料の一年間の増加冊数(一九八七年七月一日から一九八八年六月三〇日までの)を以下に掲げておく。

ハーヴァード大学 一一、九〇八冊

議会図書館 一一、七〇二冊

エール大学 一一、五一六冊

カリフォルニア大学(ロサンゼルス)

七、一八二冊

プリンストン大学 七、〇七一冊

コロンビア大学 六、二四六冊

カリフォルニア大学(バークレー)

六、一八九冊

ワシントン大学 六、一一一冊

“Committee on East Asian Libraries Bulletin” no. 86, Feb. 1989, p. 40 Table 3. に於て。

付記

本稿作製にあたって、所要資料の多くについて馬場萬夫氏の教示を得た。また安田健氏からは、データ表の利用を許された。中山八郎氏は、わざわざ時間を割き質問に応じて下さつた。ここに記して謝意を表する次第である。

(つちや・のりよし 参考課)